

2024. 6. 2 (日) 使徒16:1~5

16:1 それからパウロはデルベに、そしてリステラに行った。すると、そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人であった。

16:2 彼は、リステラとイコニオンの兄弟たちの間で評判の良い人であった。

16:3 パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

16:4 彼らは町々を巡り、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を、守るべきものとして人々に伝えた。

16:5 こうして諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えていった。

<説教>

聖霊に導かれたエルサレム会議が終わり、シリアのアンティオキアに帰って来た使徒パウロは2回目の伝道旅行に出かけます。1回目のときと同じようにバルナバと共にこの働きに出かけようとしたとき、問題が起きました。1回目のとき、せっかく連れて行ったのに途中で二人から離れて働きを止めてしまったマルコを再び一緒に連れていくか否かという問題でした。このことでパウロとバルナバの意見が激しく対立し、その結果、互いに別行動をとることになりました。バルナバはマルコを連れて1回目と同じように船でキプロス島に渡って行きました。パウロはシラスを選び、アンティオキアの教会の兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発し、陸路を取り、北西に向かいました(この方向もバルナバとは反対でした)。しかしこのようなキリスト者(同時になお罪人)同士の激しい対立をも聖霊は用いてお働きになり、パウロたちを導かれたのでした。パウロ(とシラス)はシリアおよびキリキア地方を通り、諸教会を力づけました(15:41)。エルサレム会議の結果書かれた手紙はまず〈アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちに〉(15:23)ということでしたので、パウロの道順はそれに沿っているとも言えます。

さて、〈それからパウロはデルベに、そしてリステラに行〉きました(16:1)。これらの町はパウロとバルナバが〈先に主のことばを宣べ伝えた〉(15:36)町でした(14:6-20)。〈そこにテモテという弟子がい〉ました。〈信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人で〉した(16:1)。このテモテの母、〈信者であるユダヤ人女性〉の名はユニケといい、更に祖母の名はロイスだということは後に書かれた「テモテへの手紙第2」1章5節を見るとわかります。そこには、偽りのない信仰が最初に祖母ロイスと母ユニケのうちに宿り、それがテモテのうちにも宿ったとも書かれています。その信仰とはもちろん〈キリスト・イエスに対する信仰〉(Ⅱテモテ3:15)です。おそらく、先の第1回伝道旅行でパウロたちがリステラで伝道したときに、まず、ユダヤ教徒だったロイスとユニケが主イエスを信じる〈信者〉になったのでしょう。テモテもそのとき祖母や母に倣って〈信者〉になったのでしょうか、今回パウロが二度目にリステラを訪れたときには確かに主イエス・キリストの〈弟子〉になっていました。

〈彼は、リステラとイコニオンの兄弟たちの間で評判の良い人〉でした(2)。〈評判の良い〉とは、「証しされている」という意味ですから、単に「良い人だ」と言われている

というわけではありません。彼の信仰が〈偽りのない信仰〉(Ⅱテモテ 1:5)だという〈リステラとイコニオンの兄弟たち〉の証言があったということです。その信仰は、彼が〈幼いころから聖書に親しんできた〉故に、聖書から〈知恵を与え〉られて、今や〈キリスト・イエスに対する信仰〉として見事に実を結んだ、そういう信仰だった(Ⅱテモテ 3:15)ということでしょう。また、単なる〈信者〉というより、むしろ一層よく聖書に親しみ、聖書を学び、キリストに従う、良き〈弟子〉となっていたということでしょう。また、神のみこころにかなう善き行いの伴った「生きた信仰」だった(cf.ヤコブ 2 章)ということでもあったのでしょう。

そんなテモテを見出したパウロは、テモテを今後の伝道旅行に連れて行きたいと考えました(3)。その一番の理由は今見たように彼のキリスト・イエスに対する信仰でしたが、もう一つ考えられます。それは、テモテの母は〈ユダヤ人〉でしたが、〈父親はギリシア人〉、すなわち異邦人だったことです(1)。テモテは先ほど触れたように、祖母と母によって幼い頃から聖書に親しんで来ました。しかし同時に、父親を通してギリシアの教養や文化にも触れ、影響を受けて育ちました。14 章で見たように、リステラの人々は〈リカオニア語〉も使い、リステラには〈ゼウスの神殿〉がありました。人々は真の神を知らず、異教の神々を礼拝していました。そういう異教の習慣、環境の中でテモテは育ちつつ、幼い頃から聖書に親しみつつ、ついに聖書が証している救い主キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けたのです。そういうわけでテモテは今やキリストの立派な弟子であるユダヤ人として、同時に、これから(今既にでもありますが)パウロが行く先々のギリシアの異教の文化や精神性、習慣、行動のこともよく知っていたのです。血筋でいうなら、いわば「半分ユダヤ人、半分異邦人」であるテモテには、「異邦人には異邦人のように、ユダヤ人にはユダヤ人のようになれる」素質がはあるとパウロは考えたのでしょう。そんなテモテに出会うように導いてくださった聖霊にパウロは感謝したに違いありません。

さてパウロはそんなテモテに〈割礼を受けさせ〉ました(3)。「異邦人も主イエスを信じる信仰だけでなく、割礼を受けなければ救われない」という間違っただけの教えにパウロが妥協したのでは決してありません。「割礼なしで、異邦人も主イエスを信じる信仰によってのみ救われる」こと、そして異邦人キリスト者には「〈エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定〉(4)以上のどんな重荷も負わせない」(15:28)ことこそ、エルサレム会議で聖霊に導かれて出された結論であり、今後もパウロが〈人々に伝え〉(4)ることでした。パウロがテモテに割礼を受けさせたのは、〈その地方にいるユダヤ人たちのため〉でした。「テモテを、その地方にいるユダヤ人たちの間でも評判の良い人にするため」、と言えるでしょう。〈彼の父親がギリシア人であり、しかも彼は割礼も受けていないとなると、テモテはユダヤ人たちからは異邦人扱いということだったのでしょう。そうするとユダヤ人の会堂に入ることもままならず、証しや説教をすることもできず、せつかく一緒に連れて行くテモテを通してはユダヤ人には福音を伝えることができず、かえってテモテがユダヤ人たちにとっての「つまずき」となってしまうとパウロは考えたのでしょう。後にパウロ自身が自分は「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです」(Ⅰコリント 9:20)と言いますが、ここではその原則をテモテにあてはめたのです。

同じくパウロは言います。「すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです」(同 9:22)。このように、主イエスを信じる信仰者、イエスの

良き弟子であり、血肉としても精神的文化的素養としてもユダヤ人とギリシア人の両方を備えたテモテをパウロは選び、ユダヤ人たちのためにあえて割礼も受けさせ、第2回伝道旅行に連れて行くことにしました。それはパウロがキリスト・イエスに対する信仰による救いの福音を〈ユダヤ人もギリシア人もなく〉(ガラテヤ 3:28)、〈すべての人に〉伝え、〈何とかして、何人かでも救うため〉でした。パウロの「妥協」や「せこい方便」ではなく、聖霊の導きによる〈上からの知恵〉(ヤコブ 3:17)でした。このような聖霊の働き、導きに従った、神のみこころにかなったパウロ一行の福音宣教によって、巡った町々の諸教会は更にキリストのからだとして建てあげられ、前進して行ったのです(16:5)。

日本的宗教性、異教精神、文化の真直中に置かれ生きている私たちも、決して妥協することなく、みことばと聖霊に導かれ、上からの知恵によって、神のみこころにかなう仕方で、福音を曲げることなく宣べ伝えて行きたいと願います。